毎月10日発行　第703号（通巻1207号）　定価１部40円

創立1880年

東京YMCA

2013 3 月号　発行所　公益財団法人東京ＹＭＣＡ　発行人　廣田光司
135-0016　東京都江東区東陽2-2-20　電話　03-3615-5562
URL http://tokyo.ymca.or.jp

東京ＹＭＣＡの使命

東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

東日本大震災 ２年

あれから２年。今なお悲しみと不安の中にある皆様に、心よりお見舞い申し上げます。
東京ＹＭＣＡは震災以降、多くの方々にご賛同いただきながら、私たちのできることに力を尽くして取り組んでいます。今年度の活動をご報告しますと共に、引き続きのご協力をお願いいたします。

（⇒２面「リフレッシュキャンプ」）

東京ＹＭＣＡの支援活動

■ ＹＭＣＡ石巻支援センター

◇ボランティア宿泊所　◇事務所

ＹＭＣＡの震災支援活動拠点。石巻駅から徒歩7分の商店街にあり、2012年4月からは常駐スタッフを派遣。約600人のボランティアを受け入れた。子どもプログラムの会場としても活用されたほか国内外からの視察も多く受け入れた。

宮城県

■ 石巻小学校

◇水泳指導　◇ランタン他寄贈

震災直後から物資支援等を通じ交流をもっており、夏には水泳指導を実施している。（＝インタビュー参照）

■ 立町復興ふれあい商店街

◇子どもレクリエーション
◇学習支援

被災した商店が集まった仮設商店街。この中の集会所をお借りし、学習支援やレクリエーションを行っている。
（エマオ石巻と協働）

■ グループホーム あゆかわの郷

◇歌の広場、他

震源から最も近い牡鹿半島南端の鮎川浜にあったグループホームが震災後、内陸部に仮設移転した。ＹＭＣＡは定期的に訪問し「歌の広場」や「お茶っこ」を開催。夏にはグリーンカーテンや花壇プランターを寄贈した。

■ 渡波（わたのは）第二仮設団地

◇歌の広場　◇餅つき他

「歌の広場」を定期的に開催。年末には餅つきも行った。10月には北九州ＹＭＣＡで日本語を勉強している留学生たちも訪問し、各国の歌や踊りなどを披露した。

■ 女川町総合運動公園

◇子ども遊び場プログラム

女川町は、町の中心部が20ｍ超の津波に襲われ、住民の1割が犠牲になり、住宅の9割が被災した。ＹＭＣＡは400戸の仮設住宅が建ち並ぶ高台の公園内で、定期的に遊び場プログラムを開催している。

■ 万石浦（まんごくうら）小学校

◇プール補修ワークキャンプなど

震災直後にはランタンを寄贈。昨夏には震災で壊れたプールサイドの補修作業のため、東京ＹＭＣＡ国際ホテル専門学校生らがワークキャンプを行った。

We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

インタビュー

一番の課題は心のケア

石巻市立石巻小学校
校長
鈴木 則男先生

石巻小学校には今、３０１人の生徒がいます。震災後、沿岸地区の生徒が10人ほど転出しましたが、逆に転入生も30人ほどいて生徒数は増えています。全校の６人に１人に相当する約50人が、学区外の仮設住宅や親戚宅からスクールバスなどで通学しています。

今の一番の課題は、心のケアです。これは当校だけでなく、この地区のどの小中学校でも課題といわれています。阪神大震災のときも、３年くらい経った頃にＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス障害）がピークになったと言われています。少し前に、緊急放送の装置を設置しました。携帯電話と同じ緊急音が校内に流れて「あと数秒後に地震がきます」と知らせるのですが、避難訓練をしただけで動揺したり泣き出したりする子どもたちが多くみられました。大人でもドキっとしますから、当然ではありません。また、保護者の失業などで、収入が安定しない家庭も多く、それが子どもにも影響しています。家族が離れて暮らすなど、家庭環境もさまざまです。仮設住宅が将来どうなっていくかもまだ分かりませんし、不安定です。

その中で学校としては、当たり前の学校生活を当たり前にやっていきたいと思っています。先日、６年生51人に「小学校の思い出は何ですか」と聞いたところ、「毎日の学校生活」と答えた子が何人もいました。修学旅行などの行事ではなくて、日々のごく普通の学校生活ができることが一番の思い出です、というのです。友達や先生とあったかい生活を送ることが、学校でできる一番の心のケアだと思っています。

ＹＭＣＡさんには震災後、物心両面で助けていただきました。夏休みの水泳指導やプール遊び、学習支援など、温かく楽しい思い出をいっぱい作っていただきました。ぜひこれは今後もお願いしたいです。ランタンや空気清浄機も重宝しています。石巻に拠点を設けて、地に足をつけた活動をしてくださること、本当にありがたく、感謝しています。

当たり前の学校生活を大切に

（聞き手　伊藤剛士
編集　広報室）

石巻市立渡波（わたのは）小学校
放課後児童クラブ（学童保育）
目黒たみ子先生（写真右）
阿部香久子先生（写真左）

インタビュー

学童保育の現場から

ボランティアとの交流 楽しみ

渡波（わたのは）地区は石巻市内でも被害が大きく、渡波小学校の校舎は２０１４年まで使用不能です。現在は、５キロ離れた稲井小学校の敷地内に間借りして仮設校舎を建て、授業を行なっています。そのため校庭が使いにくく、児童クラブの子どもたちは、仮設の学童専用部屋で過ごしています。

また、多くの子どもたちは仮設住宅からのスクールバスや、保護者の送迎で学校に通っていて、帰宅後も、地域に子どもたちの遊び場がない状態です。

学校では子どもたちは明るく元気に過ごしていますが、家に帰るとおとなしくなる子も多いようです。震災により親が失業中の子が少なくありません。そんな親の不安を察して、子どもは子どもなりに我慢していると思います。ふとした時に「広いお家が欲しい」「お金が欲しい」などと話し出すことがあります。親を亡くした子どもも在籍していますが、亡くした親と同性の大人と接すると時折、親を思い出すのか、甘え方や接し方がぎこちなくなる様子も見受けられます。

児童クラブは、子どもたちが思いっきり遊べて日常のストレスを少しでも発散できる場にしたいのですが、特に学校休業中の保育は長時間になり、子どもたちは退屈しがちです。職員も毎日子どもたちに混ざって遊んではいますが、ＹＭＣＡのボランティアさんが来てくださるととても助かります。ぜひまた来てください。そして子どもたちの居場所となってもらいたいと願っています。

（聞き手　伊藤剛士
編集　広報室）

赤▽三角

東日本大震災から2年が経つ。１９９５年1月の阪神淡路大震災では後に「ボランティア元年」と名づけられるほど、ボランティアという言葉が広く一般に浸透する契機となった。一方、今回の東日本大震災にはボランティアはもちろんのこと、多くの人が公益団体やＮＰＯに対して寄付を行ったとされ、２０１１年を「寄付元年」と呼ぶ声もある▼「寄付白書２０１２」（日本ファンドレイジング協会発行）によると、今回の震災寄付の総額は義援金・支援金を合わせて約６０００億円、金銭や物資を寄付した人は８５１２万人であったという。これは日本の15歳以上人口の約76.９％にもなる▼現在ＹＭＣＡが石巻、福島を中心に実施している子ども、高齢者を対象とした支援活動は、なにも特別なことではない。日常的に活動しているキャンププログラムやコミュニティー活動の延長線上に被災地支援活動があるということはＹＭＣＡの大きな特徴である。ＹＭＣＡに集うボランティアがいること、その活動を支える会員・支援者がいることは大きな宝である。「善を行い、良い行いに富み、物惜しみをせず、喜んで分け与えるように。」（新約聖書『テモテへの手紙Ⅰ』６章18節）と示された御言葉をもとに、神様に仕える気持ちを忘れずに、ＹＭＣＡに期待し、託してくださる方々とともに新たな年度も歩んでいきたい。

（会員部　村上祐介）

＝１面より

福島の親子　1250人参加

思いきり遊んで　リフレッシュして

「食材探しゲーム」は大人気。〝獲得〟した食材でカレーライスを作り、青空の下でいただきました（4月28～30日、山中湖）

「未だに外遊びを一度もしたことがありません。何も心配せずに外で歩いたり、走ったり、転んだり、草を触ったり、松ぼっくりを拾ったり、雪に触ったり出来たことがとても嬉しかったです」。郡山市に住む1歳児保護者の参加感想文である。「ＹＭＣＡリフレッシュキャンプ」は、今なお放射能の不安の中で暮らす福島県のご家族を対象に、２０１１年夏から２０１３年１月までに33回実施。累計１２５０人以上の方々にご参加いただいた。三菱商事株式会社の協賛によるもので、昨夏には、シティグループ・ジャパン・ホールディングス株式会社にも協賛いただいた。

キャンプはいずれもＪＲ郡山駅を集合解散場所とし、貸し切りバスでＹＭＣＡ妙高高原ロッジや山中湖センターに行く。連休や週末を利用した2～3泊の日程で、プログラムは選択制。ハイキング、野外料理、ボート、グラウンド遊び、水遊び、温泉や滝などの名所散策、クラフト、冬はスキー、スケート、わかさぎ釣りなど、毎回多彩なプログラムを用意している。ボランティアリーダーたちは日ごろの経験を活かし、参加者が思いっきり楽しめるように各プログラムを運営する。「他団体の保養キャンプにも参加したが、こんなにプログラムが充実しているのは初めてだった」「リーダーにまた会いたい」など、大人からも子どもからも嬉しい感想をいただいている。

11月23～25日実施のリフレッシュキャンプ参加者。（山中湖センター　富士山を背に）

またこのキャンプでは、保護者のリフレッシュや交流も大事にしている。子どもが子どもらしく遊べないことは、親にとっても大きなストレスになっている。キャンプで子どもが生き生きと走り回る様子を見て、涙を浮かべる保護者も多い。放射能対策についての考え方も一様ではないため、保護者は個々に情報を取捨選択して判断せざるを得ない。外遊びができない子どものストレスと放射能の不安とを天秤にかけて、日々悩みながら生活している様子が見受けられる。また遠隔地に転居できないことから〝大人の都合で子どもを放射能から守ってやれない〟と自責の念を抱く方も少なくない。そのため、キャンプでの保護者同士の交流や情報交換は重要である。「悩みながら生活をしているのが、自分だけではないということを知れたことが、何よりの収穫でした」といった感想も多く寄せられる。

キャンプへの参加希望者は多く、毎回抽選によって参加者を決定している。東京ＹＭＣＡは、今後も協賛がいただきつつ、このキャンプを実施していく予定である。

石巻支援センターの一年を振り返り

常駐職員　伊藤　剛士

ＹＭＣＡ石巻支援センターでは、今年度（2月末時点）の活動に参加したボランティア数は延約６００人、支援プログラム参加者・受益者の合計は４８００人になります。多くの東京ＹＭＣＡ会員・ボランティアリーダー・専門学校生・ワイズメンズクラブの皆さん・職員、また全国・海外のＹＭＣＡ関係者にも利用していただきました。

歌の広場やお茶っこ交流会などのコミュニティー支援プログラム、学習支援や遊び場作り、また夏休みプール指導といった子どもの居場所プログラムを継続して行い、地元の方々とボランティアの良き交わりの時を持つことができました。

来年度、石巻の活動を考えるにあたり、１つのキーワードは「現地化」です。昨年末、テーラー基金国際交流事業に参加した中学生が、石巻支援センターで開催した子どもクリスマス会にボランティアとして参加してくれたように、石巻・仙台でボランティア協力者の輪を広げたいと思います。特に被災地の青年がユースリーダーとして活動に参加することは、被災地の青年のリーダーシップ育成に繋がります。リーダー活動参加の意義を地元の保護者・教育関係者に知っていただくこと、また青年らが活動できるフィールドを提供することが必要かと思います。

一方で、遠隔地からのボランティアの参加の必要性も依然としてあります。震災から2年が経ち、ボランティア数はますます少なくなっています。仮設住宅を訪れるボランティアは減少し、車を持たない中高齢者の孤立化が進みます。これからの時期、団地を訪れ一緒にお茶をするだけでも大変喜ばれる活動です。被災された方々は、震災が忘れ去られることがとても辛いと言います。遠隔地からのボランティアが現地の方々と交わりの時を持ち、エールを送り続けることで、市内の復興公営住宅工事完了までの今の時期を乗り越えられればと思います。

日本基督教団とも協働して

日本基督教団でもまた、福島の子どもたちの短期保養のために「こひつじキャンプ」が実施されている。日本基督教団は、国内最大のプロテスタント合同教会で、教会での募金をもとに各種の支援活動を実施している。東京ＹＭＣＡは共催団体として、スタッフとボランティアリーダーを派遣してプログラム全般を運営し、山中湖センターなどＹＭＣＡの施設を提供している。これまでに6回行われ、１１６人が参加した。今後も継続して実施の予定である。

屋内子どもプログラム（2月24日、郡山市）↓

郡山市で「屋内子どもプログラム」

福島県郡山市の郡山ザベリオ学園講堂で2月24日、東京ＹＭＣＡ会員部主催にて「ＹＭＣＡ屋内子どもプログラム」が行われた。福島県内を会場にした最初のプログラムである。主にリフレッシュキャンプ参加者に呼びかけ３６名が参加した。堀雄二ディレクターのもと、前橋ＹＭＣＡスタッフ・リーダーの応援も受け、ゲーム大会やガガ、大縄、ドッチボールなどを行い、楽しくのびのび体を動かすことができた。

保護者スペースも設け、お茶を飲みながら歓談することができ、さまざまな思いも聞くことができた。福島県内では、学校施設等は除染されたものの不安もあり、子どもたちが外で運動することが控えられる傾向が強い。子ども期に体を十分に動かさないことの弊害も指摘されている。そのような状況を踏まえ東京ＹＭＣＡは、子ども達の生活の場である郡山市の屋内施設で、飛び回って遊ぶことのできる「ＹＭＣＡ屋内子どもプログラム」を今後も継続の予定である。今回は、郡山ザベリオ学園より多大な協力をいただき感謝であった。

（会員部　村上祐介）

すべての人を一つにしてください

ゆったりとした共生社会へ

「泥だらけになって　じゃがいもを　掘っていた時　ふと見上げた空　手でさわれそうなほど　近かったことを　憶えている　高い所にあこがれ　山の頂に立った時　なんにもない空が　果てしなく遠かったことを　憶えている」（星野富弘　花の詩画集より）

地下鉄東西線のアナウンスに「西船橋より先にお急ぎのかたは次の快速にお乗換え下さい」というのがあり、別に急いでいなくても快速に乗り換えてしまいます。文化人類学者の辻信一さんは現代社会を「過剰な社会」として上昇志向ばかりでなくゆっくりと生きることの大切さを奨め「スローライフ」を提唱しています。

東日本大震災から2年が過ぎました。震災は天罰でもなく神の不在の証明でもありません。起こってしまった現実を日本に住む私たちがどう受け止め、これからをどう生きて行くかが問われています。尊い犠牲を無駄にすることなく、社会が変わっていくことのために英知を結集したいと思うのです。いじめ、体罰、自殺、虐待、差別、引きこもりなど、今もって私たちの国は人間の基本的な生存権を保障する社会にはなっていません。それどころか「人からコンクリート」へと流れが変わっていくかのようです。「強い経済」が弱い者を置き去りにしていくことが心配でなりません。

あのよかった時に戻るのではなく新しい日本を作るのです。新しい市民による「共生社会」が求められているのです。急ぎでない時には、はやる心を抑えて鈍行に乗ってみたいと思うのです。高い空にさわれるのは必ずしも山の頂きではないかもしれません。

（総主事　廣田光司）

2013年度　支援活動計画概要

1．震災復興支援タスクチームの継続
2．福島の子ども支援
　・リフレッシュキャンプ
　・こひつじキャンプ
　　（日本基督教団と共催）
　・屋内子どもプログラム
　　（郡山市他で開催）
3．歌の広場（石巻市・女川町）
4．石巻支援センターでのプログラム
　A．子ども支援
　　・学童保育支援
　　・学習支援
　　・プール開放支援
　　・レクリエーション、他
　B．ボランティア受入
　C．被災地国際交流プログラム
　D．視察・研修受入（関係団体他）
　E．地域協働（商店街イベントへの協力
　　教会・現地ＮＰＯ等との協働）

復興・支援募金のお願い

引き続き「東日本大震災復興・支援募金」にご協力をお願いします。

＜募金方法＞

①ゆうちょ銀行（郵便振替）　00120－7－714728
　公益財団法人東京ワイエムシイエイ　東京YMCA会員事務局
②みずほ銀行　神田支店（普）1677931　公益財団法人東京ワイエムシイエイ
③三井住友銀行　神田支店（普）7656469　公益財団法人東京ワイエムシイエイ
④現金書留、東京ＹＭＣＡ各部窓口でも承ります

■「東日本大震災」とお書き添えください。領収書が必要な方はご連絡ください。
■東京ＹＭＣＡへのご寄付は、確定申告により、寄付金控除（税額控除・所得控除）が受けられます。